

NETWORK

少子化問題の解決は“おばあさん仮説”で
 ～奄美大島は、安心して暮らせる子育ての島・長生きの島～ 2

小田原、真鶴、長野、小布施の景観 を見て回って、感じたこと
 ～取り組みはじめて、効果が見えるには十数年は要するようだ～ 5

住民参加で道路と公園と川辺をつくろう
 ～住民グループ「わんさかさんわ」の取り組み～ 9

地域交通の交通は、地域で考える
 ～筑後地区交通懇談会に参加して感じたこと～ 10

サービスはお母さん達自身が決める
 ～現役お母さんの視点で運営する託児所「かぼちや畑」～ 11

見・聞・食

阿久根の体験観光で、旬の海の幸、山の幸を味わうのはいかが？ 13

玄海で採りたいちごを使った料理、スイーツを味わう
 「唐津玄海食プロジェクト-味覚ワークショップ-」体験報告 15

佐賀の春の風物詩「佐賀城下ひなまつり」に行ってきました 16

人との繋がりを大事にするマンション 17

近 況

低級中品質の家を建てた話 18

本・BOOKS

自治体都市計画の最前線 20

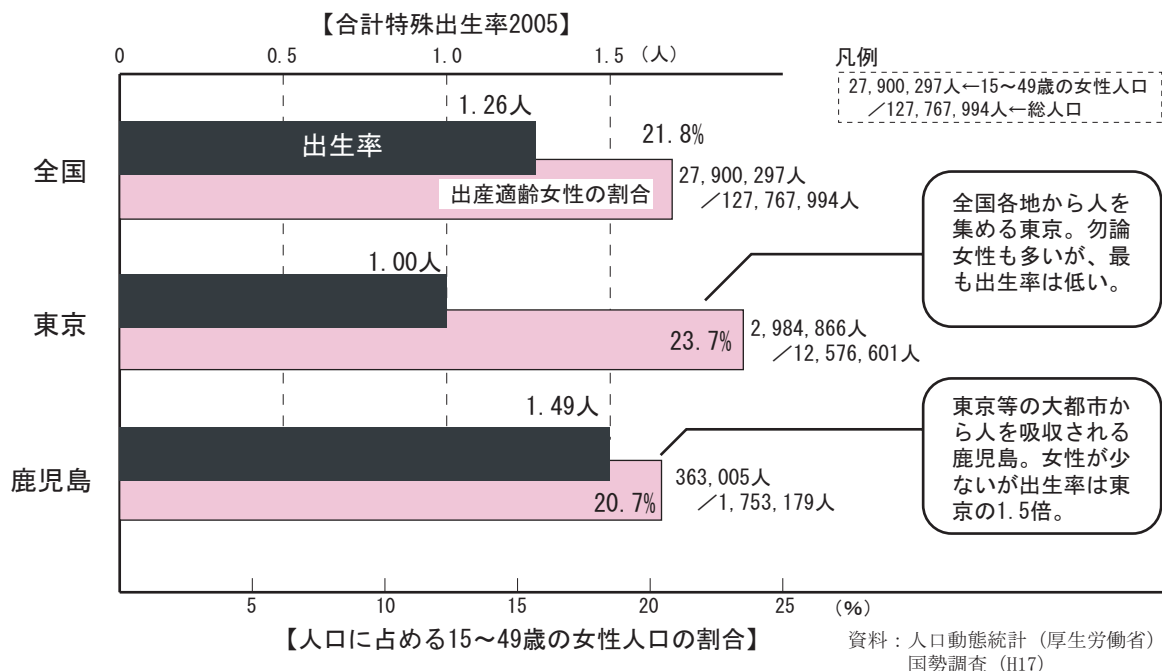
お知らせ

第15回よかネットパーティーのお知らせ 20

よかネット発行月の変更のお知らせ 20

●少子化問題は、子供を住み育てる場、地域の問題。

出生率（厚生労働省の2005年の値）と総人口に占める出生適齢女性人口（15才から49才までの女性）（H17 国勢調査）について、東京と鹿児島地域の比較を試みた。東京は全国各地から若い人を集めており、当然子供を出産できる女性の人口も多くなっているが、出生率は低くなっている。一方、人口を東京などの大都市にとられている鹿児島は、子供を出産できる女性の人口も少なくなっている。しかし、出生率は東京の約1.5倍となっている。これはどういうことか…？ 続きは「少子化問題の解決は“おばあさん仮説”で！



少子化問題の解決は“おばあさん仮説”で

～ 奄美大島は、安心して暮らせる子育ての島・長生きの島～

糸乗 貞喜

奄美大島に行ってきた。合計特殊出生率が、日本一高いといわれている地域の実態を聞くためである。日本の2000程ある市町村の中で、出生率トップ20の中に奄美諸島の市町村が7つ入っている。それだけではない。人口あたり100歳以上の長寿者の数が全国平均の4倍になっている。東京は最も所得が多いにもかかわらず、出生率は最も低い。奄美諸島や沖縄は、所得が低いのに出生率が高い。この問題のポイントは所得ではないのだろう。では何なのか、考えてみよう。

子供は生まれるもの？授かるもの？作るもの？

最近結婚式に出るのが嫌いである。理由は、スピーチの中で、当人はウケをねらって格好がいいと思っているのかも知れないが、やたらに「子供を作れ、何人作れ」などと、品のないことを言う人が出てくることがあるからである。先頃、大

臣が女性を「産む機械」と言ったとかが問題になっているが、「つくる」という言葉は同じ立場に立っている。

地域によって違うのかも知れないが、私の生まれたところでは「つくる」という言葉を聞いたことはなかった。よその家のことを言うときは「〇〇さんの家で生まれたようだ」といい、自分を主語にするときは「できた」と言っていた。つまり自然現象だという態度であった。

「つくる」という言葉をよく聞くようになったのは、1975～80年頃からのように思う。社会全体がそうなったのか、世代の違いによるのかは分からないが、そんな感想を持っている。

この頃は年をとって、堪え性がなくなっている。「作れるというなら、できのいい子供だけを作ればいい」という訳にはいかないだろう。「つくった」ので、それを仕立て上げるために、お稽古事、塾、有名校、有名大学と大わらわで仕上げ作業をする。その結果今の日本は、知的で、自立心が旺盛で、創造性のあふれた国になっているというわけだ。

とにかく、「つくる」などということが出来るはずがない。二人の男女のDNAのどれとどれを選んで組み合わせるといえるのか。それが出来るのは神か悪魔に違いない。

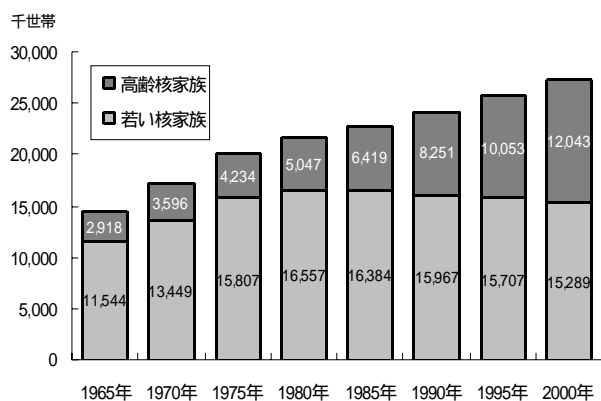
若い核家族の減少は1980年頃から始まっている。「若い人たちは、子供を二人以上持ちたいと考えている」といって、大臣がもう一度槍玉にあげられていたが、この大臣の言葉の裏には、子育ては二人でする＝核家族が基本単位だということが前提として語られている。これは今に始まったことではなく、日本の工業化の中で、都市人口が増大し核家族化が進みだしたときからのことである。そして確かに子供を持って、育ててきたのである。

大臣は二度もマスコミの洗礼を受けたが、日本人一般の考えと違ったことを言った訳ではない。

問題は、子供を産み育てるような年齢層の核家

上位20 団体名			下位20 団体名				
順位	団体名	出生率	人口	順位	団体名	出生率	人口
1	沖縄県多良間村	3.14	1,338	1	東京都渋谷区	0.75	196,682
2	鹿児島県天城町	2.81	7,212	2	東京都目黒区	0.76	250,140
3	東京都神津島村	2.51	2,144	3	東京都中野区	0.77	309,526
4	鹿児島県伊仙町	2.47	7,769	4	東京都杉並区	0.77	522,103
5	沖縄県下地町	2.45	3,172	5	京都市東山区	0.79	44,813
6	鹿児島県和泊町	2.42	7,736	6	東京都世田谷区	0.82	814,901
7	鹿児島県徳之島町	2.41	13,127	7	福岡市中央区	0.82	151,602
8	長崎県美津島町	2.39	8,423	8	東京都新宿区	0.82	286,726
9	長崎県上県町	2.39	4,494	9	東京都豊島区	0.83	249,017
10	長崎県石田町	2.39	4,752	10	東京都文京区	0.84	176,017
11	沖縄県伊是名村	2.35	1,897	11	京都市上京区	0.87	84,187
12	長崎県勝本町	2.35	6,914	12	東京都武蔵野市	0.87	135,746
13	鹿児島県喜界町	2.31	9,041	13	東京都千代田区	0.89	36,035
14	鹿児島県知名町	2.30	7,435	14	札幌市中央区	0.90	181,383
15	沖縄県伊平屋村	2.30	1,530	15	東京都品川区	0.92	324,608
16	鹿児島県住用村	2.29	1,906	16	大阪市北区	0.92	91,952
17	鹿児島県中種子町	2.27	9,675	17	東京都港区	0.94	159,398
18	沖縄県城辺町	2.25	7,291	18	広島市中区	0.94	124,719
19	長崎県上対馬町	2.23	5,226	19	京都市中京区	0.94	95,038
20	宮崎県椎葉村	2.22	3,769	20	東京都台東区	0.96	156,325

市区町村別の合計特殊出生率(1998年から2002年の平均)(資料:厚生労働省「人口動態統計特殊報告」(平成10～14年人口動態保健所・市区町村別統計)。ただし、人口は総務省統計局「区勢調査」(平成12年))



核家族世帯の年次推移 (資料: 国勢調査)

族が減っていることである。核家族とは「夫婦と子供の世帯」ということになっているが、その夫婦の年齢が問題である。90歳ぐらいの夫婦に65歳ぐらいの子供の世帯も核家族であるし、20代の夫婦だけの世帯も核家族である。「核家族化」は進んでいるが、高齢核家族(世帯主が55歳以上)の増加著しく、若い核家族(世帯主が55歳未満)は、1980年の50.2%から2000年には40.1%に大幅に減っている。その反面、若い未婚者は増加している。「少子化」が問題になっているが、子供を産み育てる元になる世帯も減っているのである。

子育ての単位は核家族なのか

ここで、子育ての話が家族をベースに進めていることに異論を持つ方もあるかも知れない。確かに北欧などではシングルマザーによる出生が、かなり多いと言われている。フランスの女性政治家が、未婚の母として3～4人の子供を育てていると報道されていた。しかしこのケースは、籍の上での未婚であって、一つの家族として暮らしていると報道されていた。シングルマザーによる出生率を云々するならば、それが両親が揃っている場合よりよいか、そこそこに同等だということ言えねばならない。

人類は、かなり長期の経験の中で、両親が主体となって子育てをするという文化を獲得してきた。近代社会における結婚という手続きは、子供をもうけて育てるための法律上の手続きだと考えられる。近代以前には神前や仏前で、あるいは近隣や親族の前で、仲人の立会いの下で式が行なわれた。それが法手続きの役割を担っていた。現代でもそれに類似の儀式は行なわれているが、実態は新婚の二人のためのショーであったり、親の見栄の場であったりしている。結婚から子育てという目的が

消えかかっているのである。

平均寿命が飛躍的に伸びた現在では、子育て期間を20年としても、子育てという共同目的を失った後の結婚生活の方がはるかに長い。私の知人にも40歳そこそこで子育てを終えたおばあちゃんという人もいる。週刊誌に「死ぬまでいっしょに」は強迫観念ではないか、という評論が出ていた。私は、子育てという目的がないならば同棲でもよいと思っている。そして子育てという目的にかかわること(孫育ても含めて)がなくなったら、結婚という法律行為を続ける意義はなくなると考えている。子育てという目的で意見が一致しない場合は、法律行為を解消してどちらかが子育ての主体になるほうが子供にとって幸せではなかったのか、と思えるニュースが多い。

“おばあさん仮説”はパンダで証明された

人類が、他の動物には見られないほどの早さで、急増殖出来たのはなぜか、ということについての説明仮説が“おばあさん仮説”である。他の動物は横ばいだったり、増減を繰り返したり、減少気味だったり、絶滅しかかたりしているのに、人類は生物学的に見た場合の超短期間に、右肩上がりの急カーブで増えてきている。

他の動物の場合、子育てをするのは雌の役割となっている。そしてある程度子育てが終わらないと、次の妊娠はしない。そして繁殖能力を失った(母親になることがなくなった)雌は死ぬのが一般的である。

ところが、人間の女性は繁殖能力を失った後も長期間生き続ける。一方、男性はかなり高齢でも生殖能力があるとされている。動物の場合、かなり高齢になってもボスとして生殖に関わっている例が多い。長生きしている「おばあさん」は子育てのサポート役として母親の負担を引き受ける。そして負担の減った母親が、次の子供をもうける気になり、その繰り返しによって人類が大繁殖をしたといわれている。

この仮説には異論もあって、「話としては面白いが、どうかな」という人も多い。ところが、この仮説の正しさをパンダが証明してしまった。この話は2～3年前に新聞で見たことがあったが、今年になって、仰向けに寝転がってほ乳瓶を手で支えながらミルクを飲むパンダの子供が、テレビニュースで何度も放映された。

念のためにネットで検索してみると、四川省の成都にあるパンダ繁殖センターでは、随分前からパンダの人工繁殖に取り組んでいたようである。その中で、パンダの母親の子育てを代行してやれば、母親が発情するようになり、さらに繁殖活動に向かうのではないかというアイデアが生まれ、それを実行したものである。実際1頭が10数匹の子供を産み、さらに孫が10数匹生まれたという例も現れている。

まさか成都のパンダ繁殖センターが、人間の“おばあさん仮説”を証明しようと考えたとは思えない。人間のパンダ飼育係が、パンダを増やすために、哺乳瓶からミルクを飲むことを教えた。その結果、自分の子に手がかからなくなったパンダの親は、次の子供を産むことになったということはよく分かる。しかし人間がなりかわった“パンダのおばあさん”は、パンダの自立＝野性に返すことには一度も成功していない。

一方、人間の“おばあさん”は、孫に知恵を受け継ぎ、親と子の間や子供間の諍いに対する緩衝の役割さえ果たした。もちろん子供の自立の妨げになったとは思えない。もしなっていたとすれば、人類は、おばあさんの役割が発生した頃から、滅亡に向かっていたはずである。

最近「佐賀のがばいばあちゃん」がベストセラーになっている。これこそ“おばあさん仮説”の最良の例であろう。

奄美大島は、安心して暮らせる子育ての島・長生きの島

奄美大島に行った理由は、中国の「社会科学院・人口と労働研究所」と久留米大学が共同で少子高齢化についての共同研究会をすることになり、それに当たって現地調査を行うためであった。

「なるほど、この土地柄なら子供も生まれやすいし、育てやすいだろう。もちろん長生きする人も多いだろう」という風土を感じさせるのが奄美大島である。市役所で話を聞いた後で、「安くて、美味しい」と教えられた、小料理屋というか、小さな食堂というか、気だてが良くて、おらかな女将さんの店に行った。島は魚に取り囲まれているわけで、活きのいい魚や野菜、豚肉の料理が多彩に出てきた。女将さんは島唄大会で優勝するような人で、奄美の名人といわれている男性の方も来られて、太鼓や三線(さんしん)も自由に使われ

てくれて、狭い店で歌と踊りが行き交う、日本・中国入り交じった賑やかなパーティーになってしまった。気候も、食べ物も、人付き合いもおおらかで住みやすい土地柄である。

出生率問題が、やたら細かいコンマ以下の数字の問題になっているが、本当は子育てする気になる風土・土地柄の問題ではないかと思った。

最近の厚生労働省が発表した、出生率の地域比較を見て頂きたい。市区町村別の上位20団体の中に、奄美の町村が7(鹿児島全体で8)、沖縄県・長崎県が共に5、宮崎県が1、東京都の神津島村で合計20となっている。一方出生率の低い方は東京都が13、京都が3、他は福岡県、大阪府、北海道、広島県がそれぞれ1となっている。出生率の高い地域は、決して所得が高いところではないが、コミュニティを主体に支え合って生きているような市町村である。出生率の低いところは、所得も多く、利便性も良い大都市である。奄美大島で感じたことを、少しダブリがあるが書き出してみる。

コミュニティがあって、近所づきあいがよい
食べ物がよい、安い

自然が豊か、うみ、さと、やま

安全な環境で、不安が少ない

病院等もあって、交通渋滞もない(旧名瀬市の中心部は人口4万人ぐらいである)

三世代家族も多い

こう並べてみると、出生率の低い大都市の対極にあることばかりである。結局「産み・育て場」があるかないかがポイントだと思った。

少子化問題は地域問題であり、全国的思考では解決できない

「少子化」の議論を聴いていると、全てが全国平均であり、細かい数字のことだけである。考えてみて頂きたい。子供を産み育てるに際して、「私は日本という国で、日本人を育てよう」などといった気分を持つたりするはずがない。人々が意識するのは街や村である。元難民高等弁務官であった緒方貞子さんが「国はなくても、コミュニティがあれば人々は生きていける」と書いておられたが、子供を産み育てるのも同じことである。

問題解決の糸口は、推計値の細かい計算でも、女性の問題でも、難しい理念の問題でもない。子

	総人口	出産適齢女性人口	割合
全国	127,767,994	27,900,297	21.8%
東京	12,576,601	2,984,866	23.7%
鹿児島	1,753,179	363,005	20.7%

核家族世帯の年次推移 (資料: 国勢調査)

供を産み育てる場のある「地域づくり」の問題である。

もう一つデータを挙げてみる。出生率の基礎となる15歳から49歳までの女性が何処に多く住んでいるかを示すものである(全国、東京、鹿児島のみとした)。東京は全国から若い人を集めて(当然15歳から49歳までの女性も)、最も出生率が低い。所得データを見ても、東京は沖縄や鹿児島の2倍になっている。

所得のゆとりはあっても、東京の女性たちにとって「結婚し、子供を育てる場」としての評価は低く、そのような気持ちが芽生えやすい環境ではない、とみているのではないか。一方、おばあさん側から見ても、「おばあさん仮説」の役割を發揮できるような条件を持っていない。

今後の都市政策・地域政策に、「子育ての場」のことを入れて頂きたい。“おばあさん・おじいさん役”を、公共団体が、核家族との対応だけでやっていけるのか。今までわれわれは、町内会や集落を軽視しすぎてきた。子供を産む数だけの問題ではなく、“場”の問題を地域政策に入れるべきである。

せめて東京・大阪などの大都市は、全ての小学校で夏休み、冬休み、春休みそれぞれの機会に、その期間の半分ぐらいの日数は、臨海学校、林間学校、スキー学校などで、緑にふれ、土と親しみ、水と親しむような機会を作るべきではないかと思う。学級定員などはもっと多くてもかまわないと思う。これこそが「ゆとり教育」である。おそらくいじめなども発生すると思うが、それはワクチンの役割を果たすリハーサルになるのではないかと考えている。一方の受け入れる田舎などでは、都市との縁組みが出来て、地域振興の役割を果たすものと思う。(いとりのり さだよし)

小田原、真鶴、長野、小布施の景観を見て回って、感じたこと

～取り組みはじめて、効果が見えるには十数年は要するようだ～

山田 龍雄

佐賀県や大分県で景観に係わる仕事を携わるようになり、実際に景観行政に取り組んでいる先進地も見ておかないといけないと思い、神奈川県の小田原市、真鶴町と長野県の長野市、小布施町を駆け足で見て回った。日祭日に行ったので、役所担当者へのヒアリングはできなかったものの、まちを眺めて回るだけでも十分に景観づくりを頑張っている都市の取り組みの一端を垣間見ることができた。ここでは、景観のことだけではなく、観光的な視点も交えて現地で感じたことを報告したい。

「美の基準」を創設した真鶴町の景観はこれからか？

一日目は、まず真鶴町に向かった。真鶴町の景観づくりは昭和60年以降のリゾート開発にのってリゾートマンションが建ちはじめ、当時の町長が水容量が少ない町で、これ以上水が無くなるのを危惧し、平成2年に「地下水採取の規制に関する条例」と「上水道事業給水規制条例」の水に関する2つの条例を制定し、無秩序なマンション開発を抑制したことから始まる。さらに、平成5年には「まちづくり条例」を制定し、この中で曖昧な言葉である“美”というものに真正面からアプローチし、「美の原則」というものを取り入れたことで一躍、まちづくりや都市計画関係の人々から有名な町となった。

私も、「美の条例」という本を読んで、我が国の条例の位置づけや真鶴の独創的な考え方は非常に刺激を受けたものの、「美の条例」なるものがどの程度の効果を發揮しているのかを是非見てみたいと思っていたので、今回の視察は非常に良い機会であった。

当日は、あいにく霞がかかっていて遠くの景色は見えにくく、海岸付近に立ち並んでいるであろうと思われるマンション群の風景は見られなかったものの、一般の住宅地の中に少しお洒落な別荘風の建物が混在している様子が見られた。正直言って「美の条例」を制定して早や13年が経過して



リュックを背負って歩く中高年グループ(真鶴)
 いるわりには、景観として整った街なみを見ることはできなかった。これは、バブル期から、既に開発が進んでいたことと、開発事業者への拘束力を持たない「条例」の限界があったのかもしれないと思った。しかし、現在は、景観法に基づいた景観計画区域を区域毎に定め、細やかなルールを決めている。景観法に則った景観計画と条例化によって、真鶴町の「美の条例」という高い理念が風景として見えだしてくるのは、これからではないだろうかと思った。

<歩き回っている人が多い町>

真鶴町では、やたらリュックを背負って歩いている中高年のグループが目についた。道路沿いには海鮮ものをウリにした食事処が所々にみられ、関東圏のレクリエーションの場になっているようだ。

真鶴町は相模湾に突き出した半島であり、駅から岬の先端まで往復しても7km程度であり、しかも景色も楽しめるロケーションであることからハイキングコースとしてとっておきのところのようだ。大都市近郊で海の景色を楽しめ、美味しいものを食べられるといった意味で、真鶴町と福岡市の西側近郊に位置する糸島地域と比べてしまう。単に景色や食べ物から言えば、地元轟負があるかも知れないが、糸島地域の方が勝っているように感じた。

小田原城に気を配った細やかなルール設定

小田原市では、小田原城周辺と市街地を見て回った。小田原駅から小田原城に向かう商店街沿いの屋外広告物に大きなものがなく、どちらかというと普通見慣れた広告物よりも一段小さいように感じた。また、駐車場空間がむき出しで見えないように板塀で囲んでいるなど、なかなか細かいところにも景観に配慮した様子がうかがえた。小田



駐車場の板塀の様子(小田原)

原市の景観計画によると、この小田原城周辺と駅前周辺は景観計画重点地域に指定されており、高さ、建物形態、意匠、色彩など細やかなルールが決められている。

また、屋外広告物に対しても「屋外広告物条例」を制定し、色彩や大きさなどを規定している。

小田原市が、ここまでの景観計画を行き届いている背景を調べてみると、20年近い歴史があることがわかった。小田原市の景観計画の取り組みは、昭和62年から始まっており、平成元年には「都市景観ガイドライン」、平成5年度には「景観の自主条例」の制定、平成17年度に景観法に則った景観条例及び景観計画を策定している。このように景観に関しては、かなり歴史を積み重ねてきた街であるからこそ、ここまで実行力のある取り組みができるのであろう。

<洗練されたサインや案内板>

小田原城周辺や市街地を歩いていて感心したのが、観光名所の場所を知らせるサインが要所々にあることと、かなり設置箇所も多いことだ。また、設置されている案内板のデザインも洗練されていて分かりやすい。観光地でも、これだけ適当な場所にサインや案内板があると、やはり歩きやすく便利がよいと感じた。

<街かど博物館を巡る仕掛け>

小田原市での滞在時間がなくなって、実際には体験できなかったのが、「街かど博物館」だ。これは街なかにある伝統的な工場やお店を博物館にみなして、地域の観光のひとつとしているということで、その発想としては特に新しい取り組みではない。

しかし、小田原市では蒲鉾、お菓子、陶磁器、和紙などの店舗や工場を街かど博物館として見て



サインと案内板の写真(小田原)

回るコースをつくっており、イベント時だけではなく、毎日案内してくれるようになっている。また、市街地内の「街かど博物館」のコースが2～3kmと手頃なのがよい。本当に蒲鉾づくり体験できなかったのは残念であった。今度は景観ではなく、街かど博物館体験を目的に小田原に行きたいと思った。

善光寺門前通りの徹底した景観は見事なもの

2日目は長野県に入り「善光寺参り」と「小布施」というスケジュールだった。昼前に長野市に到着し、バスに乗って善光寺に向かう。善光寺バス停から善光寺仁王門に向かって歩いていると、マンションの1階部分にも瓦葺きの庇を取り付けていること、1階部分の軒先が揃っていることなどが街なみが徹底して揃えられていた。

特に、マンション1階部の瓦庇は、上下に取り付けるなどして変化を付けているためか、違和感なく周辺の街なみと調和しており、「頑張っているなあ」といった印象を受けた。

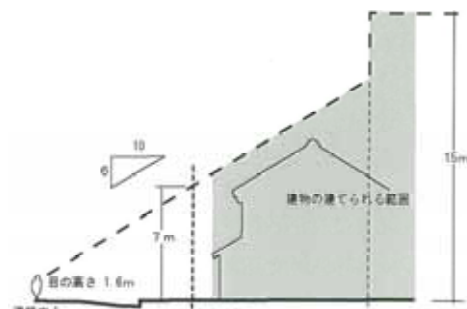
後で調べてみると、善光寺境内の南側の地区は、景観計画重点地域に指定されており、右図のような形態規制がかけられている。しかし、最初に述べたマンションは重点地域から外れている。そこで、市役所の都市計画課に電話ヒアリングをすると、「このマンションは優良再開発事業で建てられたものだったので、市の方から街なみを揃えてもらうようお願いした」とのことであった。このような市の方の熱心な取り組みと地元の協力があってこそ、天下の善光寺門前町の街なみ景観を創りだされていると思った次第である。

<心地良い空間、蔵づくりのパティオ>

善光寺仁王門から約200m南側に下ったところに、蔵が立ち並んでいる一角があったので、気に



マンションの1階の瓦庇(長野)



門前通りの形態規制のイメージ(長野)



蔵楽庭の中庭空間(長野)

なって立ち寄ったみた。ここは10数棟の蔵で構成された路地や中庭があり、その蔵の中には飲食店、家具店、雑貨店、ギャラリーなど20数店舗が入っている。ここは「ばていお 大門蔵楽庭(くらにわ)」という再開発した商業センターであった。この蔵群の一角にある情報センターで話を聞いてみると「平成15年に長野市のTMO事業のひとつとして取り組まれ、約1,000坪の敷地に残る10数棟の蔵を活かして商業ゾーンを創った。オープンして2年目。」とのことであった。

経済産業省（旧通産省）が一時期、商業活性化の手法のひとつとして地域の商業者の共同出資による「パティオ事業」なるものを行っている事例を九州の2箇所（大川市、都城市）で視察したことがあるが、どちらもスペインかイタリア風のデザインで構成されていた。この西洋風のものに比べ、この蔵楽庭の中庭の空間は、周辺の町屋景観と調和しており、なかなか心地よい。古い蔵づくりの中に、イタリアンレストランや家具店など入店していて、古さの中にも新しさがあり、逆にお洒落な雰囲気を出している。もっと時間に余裕があれば、ここで滞在して美味しいものでも食べていきたいところであった。

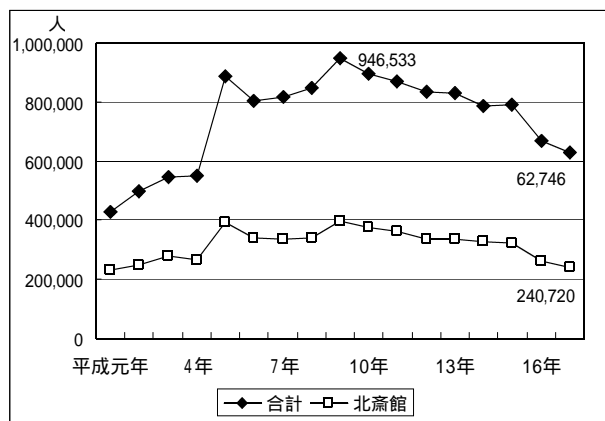
観光客が減少傾向の小布施はどうなるのか？

15年ほど前に「小布施町は葛飾北斎が逗留したときの絵が残っていて、それで北斎館をつくった。栗ようかんが有名で、まちの佇まいも落ち着いていて、観光客も増えている」という話を聞き、また、栗ようかんの老舗である小布施堂が中心に行った小布施堂界隈の街なみや路地空間の雰囲気は、建築写真などで見ていたので、是非、現物を見たいと思っていた町の一つであった。

<北斎館入場者も減少気味>

宿泊した「ゲストハウス（蔵を改造したプチホテル）」のお世話係の人に、観光客の状況を聞いてみると「今年は暖冬のせいで小布施町も雪もなく、この時期にしては観光客が多い」とのことであった。ゲストハウスのすぐ近くにある小布施堂界隈にお店が建ち並んでいるところに行くと、栗ようかんのお店が3～4件建っているのには驚いた。このようにお店が増えるという観光の波及効果は十分あるようだが、観光統計を見てみると平成9年のピーク時の約95万人を境に減少傾向にあり、平成17年には62万人となっている。観光客の約4割を占める北斎館の入場者数も平成9年の約40万人から平成17年には24万人と減少している。各施設の入場者数のダブルカウント分を考えると実際の観光客は、割り引いて考えないといけないが、減少傾向は変わりはない。

観光客が減っている要因としては、北斎館のリピーター客が減っていること、他の北斎館以外に目玉となる観光施設がないことから新規観光客の開拓ができていないことなどが考えられる。なかなか観光産業も、長期間維持していくことは厳



小布施町の観光入込客数の推移（資料：小布施町観光統計資料）

しいといえる。小布施町には温泉がなく、宿泊施設も少ないことがリピーター客を増やせない要素になっているのかも知れない。

<試飲コーナーには、酒の語り部がいる>

小布施で小布施堂に次いで有名なのが「榎一市村酒造場本店」である。日本酒好きのアメリカ人女性のセラー・カミングさんを取締役に迎え、新たな酒造りやイベント活動でも有名になった酒造場である。土産にお酒を購入しようと思い、店に入るとパーカウンターがあり、シングルのステンレスカップで試飲ができるようになっている。洋酒バーの雰囲気であるが、中身は日本酒である。カウンターでは榎一の法被を着た50歳代の男性がお相手してくれる。いろいろお酒について質問すると、最近のお酒事情、榎一のお酒造りのコンセプトなどを話して頂いた。榎一では「地ビールが流行りだした頃、地ビールをつくるかどうかを社内で話し合ったが、やはり地ビールといっても“地”のものは水だけではないかという話になって、地ビールづくりを中止し、清酒一本で勝負することにした」などの印象深い話を聞くことができた。話が進むとお酒もすすみ、ほとんどの酒の種類は試飲し、すっかり酔っぱらってしまった。

小布施では岩松院にある北斎の天井絵を見れたことと、榎一で試飲した時間が至福の時であった。

現地をみて、後で調べてみると景観として目に見えて効果が現れてきている市町村では、取り組み始めて10数年を経過している。景観といっても地元との合意形成を図りながら、ルールを決め、協力して頂きながら景観をつくっていくには時間がかかるものであることを再認識させられた視察旅行でもあった。（やまだ たつお）

住民参加で道路と公園と川辺をつくろう
～住民グループ「わんさかさんわ」の
取り組み～

本田 正明

「長崎県にある三和地区って知ってる？合併して長崎市になったんだけど」といわれても、土地勘がないので、場所のイメージが全然わからない。私が所属していた九州大学の景観研究室が、三和地区のまちづくりに関わっているということで、手伝いに呼ばれ、気軽に「いいですよ」と答えたのだが、三和地区まで福岡から車で2時間半ほどかかるとは思わなかった。ほとんど大阪までの日帰り旅行気分である。

三和地区は長崎市内の中心部から南に30分の場所にある長崎市のベットタウンだ。三和地区のまちづくりは、長崎県の長崎土木事務所が住民参加型で道づくりができないかと、地元と九大に呼びかけたのがきっかけだそう。

三和地区のメイン道路である栄上為石線のデザインを検討する委員会が設置され、議論を重ねるうちに、道路だけでなく、周辺環境も一体的にやろうという話になり、ポケットパークづくりや河川環境の整備などもテーマになった。

栄上為石線には、行政センターや健康づくりセンター、中学校が立地しているので、住民の生活道路としてかなり交通量も多いところだ。道路と平行して流れている為石大川は、地元のおじさんが「昔は海で泳いだ後、よう、こん川でカラダを洗って帰った」というくらい親しみを持っている場所だ。以前は河川環境が悪化して荒れてしまっていたのだが、地元の人たちが「川辺を大切に美しくする会」をつくり、定期的に河川清掃をするなどして、今では地元の散歩コースにもなっている。その他にも、地元の人たちでバスの待合所をつくったり、桜の植樹を行うなど、まちづくりにとても積極的に取り組んでいる。

栄上為石線デザイン検討会議は、平成17年から2年間かけて22回ほど開催されており、現場での問題探しから、模型での検証などの取り組みを行っている。大人から中学生まで参加しているそうだが、現在いっしょにやっている中学生たちは、もう既に3代目だそう。ユニバーサルデザイン



旧三和町の位置



ポケットパークづくりの様子

の歩道づくりには、車椅子利用者や視覚障害者にアドバイスをもらいながらデザインの詳細を考えている。こうした活動を通じて、「わんさかさんわ」という地元住民のまちづくり組織が生まれている。

今年は、都市再生モデル調査の採択も受けたこともあり、これまで検討してきたデザインを実際の道路に作ってみて、歩いてみるという社会実験によって検証し、実施設計に活かそうという取り組みと、残地を活用したポケットパークづくりを住民ワークショップでつくろうという2つの取り組みを行っている。

私は、1月に行われたポケットパークづくりのワークショップの時に、初めて現地を訪れたのだが、着いたときには既に40人を超える人たちが集まり、作業を始めていた。狭い敷地なので、上からみると人ばかりで地面が見えないくらいだ。地元でも関心が高いようで、テレビや新聞などの報道関係者も10人くらい集まった。山盛りになった土を均しながら、桜やツツジをみんなで植えていく。はじめのうちは、大人が作業をリードしているのだが、疲れてくるとだんだん中学生の方がリードしていた。若い人の力はやはり欠かせない。



車椅子での歩道の使いやすさなどについて聞いてみた

研究室の学生が、参加した感想をヒアリングしたり、アンケートをとっていたので、その結果を見てみると、「これからもまちづくり活動に関わって行きたい」「通学のときに気にかけるようにしたい」などという声が多く寄せられていた。若い世代が地元に着用を持ってくれるのは、非常にいいことだと思った。

2月には、2年間かけて準備してきたユニバーサルデザイン歩道の社会実験を行った。実際の道路を部分施工して、地元の人に歩いてもらい、使い勝手をヒアリングしたり、アンケートに答えてもらうのだが、寒い時期なのと、ポケットパークと比べて内容が地味なので参加者が増えるかが心配だった。それでも「わんさかさわ」のメンバーが懸命に呼びかけを行ったおかげで、50人近くの参加者を得て実験を行うことができた。

結果、車椅子利用者は勾配や凹凸がない方がいいのに対し、視覚障害者は逆に勾配がある方が、道路との境目がわかりやすいという。両方によいデザインはなかなか難しいというのを痛感したのだが、現状でも不便さは感じないという意見をいただいたので、関係者はほっとしていた。

夕方には、照明の明るさや安全性などについての社会実験を行ったのだが、ランプ型の街灯デザインだと、「ここは谷間の町なので台風の風が強く、街灯が飛ばされないか不安」といった地元に住んでいないとなかなか気づかない貴重な意見も頂いた。是非、実施設計にもうまく反映して欲しいと思う。
(ほんだ まさあき)

地域交通の交通は、地域で考える
～筑後地区交通懇談会に参加して感じたこと～

原 啓介

1月27日、筑後川発見館「くるめウス」で、「筑後地区交通懇談会」が開催された。主催はNPO法人筑後川流域連携倶楽部と、北部九州圏都市交通計画協議会（九州地方整備局、福岡県、佐賀県、北九州市、福岡市）であった。これまで協議会は、平成17年度に第4回パーソントリップ調査を実施し、地域交通のあり方について、県内を4ブロックに分けて地区毎の懇談会形式で議論している。今回は、筑後ブロックの交通懇談会であり、NPO法人筑後川流域連携倶楽部（久留米大学経済学部教授）の駄田井正理事長の司会のもと進められた。

久留米周辺の交通体系や景観についての基調報告や、コミュニティバス・共用自転車の事例が紹介された後、参加者全体での意見交換が行われた。私も、昨年度の柳川市での都市再生モデル調査結果についての基調報告と、実行委員というかたちで参加させて頂いた。意見交換の中では、久留米周辺の効率的な交通体系、中心市街地の通過交通を減らすといった具体的な提案が出された。筑後地域の交通に対する住民の方々の思いは強く、思いを持った人の意見を集約したり、膝をつき合わせて議論する場が設けられたということ自体に、価値があったという声が挙がっていた。

交通懇談会に合わせて、久留米大学の共用自転車システムの「水色の自転車」や、ペロタクシー福岡に協力して頂き、体験乗車ができるイベントが開催された。特にペロタクシーは人気で、ひっきりなしに乗車希望者があった。二日間の実験中に約170人の利用があり、ドライバーさんはとても大変だったと思う。ペロタクシー福岡は、子供の送迎など、地域に根ざした活動を行っており、寺社町巡りなど観光面での取り組みと合わせて、とても面白い取り組みをしていると思う。

ところで、自転車を取り巻く交通の仕組みは、

	平成7年	平成17年	
自転車関連事故	136831	183653	約1.3倍
対自動車	122470	152287	約1.2倍
対歩行者	563	2576	約4.6倍

自転車事故が急増（資料：警視庁ホームページ）



イベントでは、水色の自転車やペロタクシーをはじめとした、珍しい自転車の試乗会が行われた

大きな変革点を迎えている。平成19年2月の「道路交通法改正試案（警察庁）」によると、自転車が歩道を通行しており、事故が急増している現状を見直し、道路標識などにより通行可とされている場合のほか、児童・幼児などが運転する場合、危険を回避するためやむを得ない状況である場合に限り自転車の歩道通行を認める、という方向にシフトしており、車に偏った道路政策を転換し、車道を削って自転車の走りやすい道を増やす方針に転換している。自転車好きの私としては、この方向性に大賛成である。大気汚染、地球温暖化といった環境面を考えると、自動車のために道をゆずるのではなく、欧米の様に自動車をどけてもっと自転車専用道を整備してもいいと思う。（道路交通法改正試案についての詳しい情報は、「自転車ツーキニスト」の疋田智氏のメルマガを参照）

大都市と地方では、道路や歩道の整備状況、利用状況に大きな差があるし、日本全国画一的な交通ルールを押しつけるのではなく、地域の交通の仕組みは地域で考える、という世の中になればいいと思う。（はら けいすけ）

サービスはお母さん達自身が決める

～現役お母さんの視点で運営する
託児所「かぼちゃ畑」～

愛甲 美帆

福岡県二丈町でグリーンツーリズムの活動をしていたグループのお一人で、介護の仕事をされていた橋本聡美さんが、昨年12月にご自身で託児所をに開所されたことを年賀状で拝見した。葉書にあったふんわりとした託児所の絵の雰囲気惹か



隣に庭が広がる託児所「かぼちゃ畑」
れて、どのような託児所か見学させていただいた。

不足している部分をサポートしたい

託児所「かぼちゃ畑」は、現在住宅開発等で人口が増加している福岡市西区の住宅街の中にある。もともと橋本さんは、高齢者施設で介護の仕事に携わっておられ、グリーンツーリズム活動を行うグループ「よるづや」では、高齢者施設を利用するお年寄りのレクリエーションとしてみかん狩りやジャムづくりなどの企画、お年寄りの知恵袋交流として子どもとお年寄りの交流企画などもされていた。

託児所の開所を思われたのは、4歳の息子さんと2人暮らしで、土日祝日・夜勤勤務のあるサービス業で働いていたため、幼稚園や保育園で預かってもらう時間だけでは困り、保育サービスの不足を痛感されたことから。「同年代が集まる保育所や小学校で放課後を過ごすことのできる学童保育で不足している部分をフォローできるサービスを行いたい」「これまで行ってきた活動のように、子供達の成長に関わりながら母親が働きたいと思いついた時からサポートをしていきたい」と言われた。

施設の概要

託児所は、認可外保育所である。定員は40名で、対象は0歳～小学校高学年まで、24時間対応可能で、土日祝日は予約制である。利用料は、入園料・登録料は無く、年齢別に1時間あたり0歳児の700円～小学校高学年160円の基本料金を基にした利用時間ごとの請求である。利用時間が長い程利用料が安くなるシステムである。橋本さんが月極か一時利用という2体系の利用システムでは子どもさんを預けられなかった経験からこのような料金体系をご自身で考えられた。利用者一人ひとり



給食を食べる子供達と先生
に対応する送迎サービスも行っている。

橋本さんは、庭がある保育園にしたかったそうだ。施設の土地は借地で、平屋建ての建物が約40坪、100坪の園庭がある。知り合いの不動産が土地探しや建物の建設をフォローされた。この土地はもともと畑で、地主さんが何かに使えないかと試案していたところだった。託児所という話には奥さんが特に賛同されたそうだ。庭があることで外の変化を見ることができ子供達も落ち着くそうである。今、園庭の一角にほうれん草が植えてあり、なんとプレゼントされたという釜戸もある。

建物は住宅メーカーの仕様にオプションで保育所として必要な非常灯の設置や窓の数、水回りなどを追加して作られた。スタンドガラス付きの玄関から部屋の中まで、施設というよりもリビングの広い、きれいな家に遊びに行ったという様子である。今幼稚園や保育園は運営の世代交代の時期であり、またオープン前に新聞に掲載されたこともあり、閉園する保育園などからベビーベッドやおもちゃ、電子ピアノなどの備品は譲り受けたものが多いそうだ。

スタッフは現在8名（内正社員2名）で、よろづやの活動やこれまでの知り合いの方などから募集された。保育士で、自分の子どもを連れて働いているスタッフからは「仕事への復帰はまだかなぁと思っていたけど、自分の子どもの成長も見ながら仕事もできるので嬉しい」と言われたそうだ。

人の繋がりや活動を活かした保育プログラム

かぼちゃ畑の給食は、栄養士さんによる手作りで、よろづやの活動でお知り合いであった糸島の農園と提携した野菜を使用されている。通信「かぼちゃだより」によると、子ども達がみそ汁やスープが大好きな様子や玄米で仕入れて毎日精米し



プレゼントされた釜戸
で炊かれたご飯を食べている様子が書かれてあった。玄米は希望の方には販売もされている。

託児所でのプログラムの中には、橋本さんが以前勤務されていた高齢者施設にひなまつりの歌を披露しに行ったり、提携している農家の畑に遊びに行き、ツクシをとったりと、これまでの繋がりが活かされている。お母さんの中にはイベントがある日に預けますという人もいるそうだ。

利用の形はお母さんが決める

利用者は、平日が平均20名、1歳以上2歳未満で第2～3子の子供が多いそうだ。土日は10人以下の利用で、年齢層があがる。今のところ、夜間の預かりは無いそうだ。お母さんは、パートタイムで週3回程度働く人の利用が多い。

平日に通っている子のお姉さんと土曜日に来る小学生は他の子供達の面倒をみってくれるそうだ。

隙間の時間をサポートと言われるように、利用されている例を伺うと8:30からの保育園を利用している子どもさんを、親御さんの出勤時間に家に迎えに行き、40分この託児所にいた後、かぼちゃ畑から日中過ごす別の保育園へ送ったり、夜勤のお父さんの帰宅時間と朝のお母さんの出勤時間の差1時間だけをここで預かる子供さんもいる。

依頼があるお母さんは、ぎりぎりまで自分で頑張っていて、どうしても無理な時に電話がかかってくる事が多く、はじめからできないという枠を設けるのではなく、お母さんが何をどう欲しているのかを聞き相談しながらサービス内容を決められているそうだ。

今後は病児保育や企業の子育て支援なども行い
広がりのあるサービスを展開したい

庭の釜戸は、オープニングでもちつきをした際に1回使ったそうだ。釜戸でご飯を炊いたり、団

炉裏の設備をつくりたいと思いがあがるが、そのようなことや農家との交流など楽しいプログラムは、基本事業の収益があつてこそなので、事業を軌道にのせて充実していきたいと言われた。

橋本さんは、土地探しから建設運営まで5ヶ月というスピードで託児所を開設された。自分自身がせっぱつまっていたからできたというお話であったが、良い内容で安心して預かるということに留まらず、社会的なサービスとして広がりをつくっていくことも大事だと考えられている。今後は、病児保育や次世代育成支援として企業の子育て支援の利用なども手がけていきたいということであった。

友人同士で、時々仕事と家庭と子育てについて話すこともあるが、これらのテーマは自身だけの問題で解決することでもなく、その時にどうかなるのだろうと思う反面、やっぱり不安を覚えることもある。子どもを育てる環境は、様々な要素が絡むが、いざという時、地域に柔軟に対応してくれる場があることは安心感がある、と取材して改めて実感した。 (あいこう みほ)

阿久根の体験観光で旬の海の幸、山の幸を味わうのはいかが？

本田 正明

鹿児島県の阿久根市の街づくりに携わられている元所員の尾崎さん((有)職彩工房)から、「阿久根で地元産業の体験観光を進めたいのでモニターになってくれないか」という誘いがあり、一泊二日の体験観光旅行に出かけた。最近の旅行者は、時間とお金を持っているので、いい場所や美味しいモノなんかがあれば、場所は関係なくやってくるという話をよく聞く。それでもやはり片道3時間の行程は遠いなあというのが実感だ。

九州新幹線出水駅で肥薩おれんじ鉄道に乗り換えると、急に時間の流れがゆっくりとなったような気分になる。コトンコトンと進むワンマンディーゼル列車に揺られながら、「福岡市から1時間半の呼子は日帰りレジャー圏なので、阿久根は鹿児島や熊本の市内からの日帰りレジャー圏になるのかな」などと土地柄を想像した。阿久根駅では、2日間案内役を務めてくれる地域雇用創出促進協議会のスタッフ2人が迎えにきてくれていた。人



アジの開きづくりを体験

口は25千人で、文旦(ボンタン)などの農業と漁業が主要産業のまちで、老年人口は3割を超えている、といった阿久根の概況を教えてもらう。バスもあるのだが、国道3号線沿いしか停車せず、便数も少ないので、自動車がないと生活できないそうだ。若いスタッフの人に、買い物をどうするのか聞いてみると、郊外に便利なショッピングセンターがあるとのこと。

リスク管理も必要

今回はモニターということで4つの体験コースが組まれている。初めは、ウニ加工体験ということで、水産加工所に行ったのだが、時化で全くウニがないという。対応していただいた女性社長が申し訳なさそうだったが、仕方がない。せめて雰囲気でも感じようと、これまでどんな人が体験したかを聞くと、「関西方面の人が、インターネットを見てきたこともありましたが」、「ウニを傷つけないようにする慎重な作業なので、1箱の半分ぐらいになると集中力が切れるようです」とのこと。たしかに職人的作業なので、手先が不器用な私などは5分ぐらいで音を上げたかもしれないと思った。ただ、雨天や時化などの気象の影響を受けやすい体験観光は、素材がない場合などの対策として、代替品や別サービスを準備するなど、せっかく来てもらったお客をがっかりさせないリスク管理が必要だなと感じた。

体験観光のウリは「人間魅力」

次の体験は、魚の加工体験だ。もらったパンフレットには「阿久根近海でとれた新鮮なアジやカマスを捌いたり...」とあるので、こちらも時化の影響があるのでは、と心配になったのだが、冷凍保存していたアジを準備してくれていたため、無事に体験することができた。

こちらも女性社長さんが「魚の捌き方は、背開



左上:キビナゴの刺身 右上:じゃこめし
 左下:キビナゴの天ぷら 右下:キビナゴの酢の物

き・腹開き・観音開きの3つがあってね」といいながら、みるみるうちにアジを捌いていく。「昔は、お頭が残る観音開きだったんだけど、エラの付近が腐りやすいから、衛生面の問題で今は腹開きでつくるの」と簡単な干物ヒストリーを教えてください。「でも腹開きは難しいから、背開きからやってみるといいよ」と言われ、恐る恐る魚に包丁を入れる。予定と反対側に身がついていたりと思うように捌けないのだが、それでも10匹くらい捌くとなんとなく商品らしいものができるので楽しくなる。しかし、魚加工体験そのものよりも、魚を捌きながら聞く、阿久根の漁師生活の話や百貨店での物産市での干物販売の苦労話の方が楽しかった。体験観光というのは、体験そのものではなくて、地域の人とコミュニケーションを図れるところが魅力なんだと感じた。

その夜は、魚加工体験させてもらったところにそのまま泊めてもらう。これは体験観光ではないものの、せっかく鹿児島島の港町にきたんだからと、キビナゴの刺身、すまし、天ぷら、お吸い物とキビナゴづくしのフルコースをいただいた。正直にいうと、このおもてなしが一番感動したので、宿泊体験をする気はあるのか聞いたところ、「本業を少しづつ減らしながら、自分の趣味の部分としてやっていければ」ということだった。

次の日の朝は、魚市場の見学をするということで、朝6時にお迎えがくる。前の晩に焼酎を飲み過ぎたことを後悔しながら、市場に着くと既に人だかりが出来ている。その割には意外と静かだなと思っていたら、阿久根では“競り”ではなく“入札”で値段を決めているからだと教えてくれた。それでもト口箱を載せたフォークリフトやおばちゃんたちが目の前をどんどん横切っていくので、

案内してくれる人がいなければ、観光客はとても近づけないだろうなと思った。

宿泊や周辺観光地といっしょに仕掛ける

2日目は、前日と違って農村での体験観光だ。タケノコを掘ると聞いて、なまじ糸島などではよっちゅうタケノコ掘りを手伝っているのだから、本当にこの時期にとれるのかと半信半疑だったのだが、本当に採れた。とはいっても、私たちだけだったら1日中、山にいても無理である。「タケノコがあるところは、ちょっと土が盛り上がっているから」というのは、いつも山に入っている人が、地下茎の位置や普段との変化を見極めることができ、初めて有効なアドバイスになるんだと思う。さすがにこの時期(3月上旬)のタケノコはキロ1,000円ぐらいするそうだが、「最盛期にはキロ500円しかならん」ときもあるそうだ。

タケノコ掘りの後は、その農家の自宅に戻って農家料理をいただく。これまでの体験とうって変わって洗練された盛りつけがされている。タケノコの刺身とみそ汁、タラの芽の天ぷらなど山菜のオンパレードだ。川エビの素揚げなども全部近くで採れたものだそうである。

健康志向の都会女性のニーズにとっても受けそうなメニューだ。お味噌も自家製で、「春は食材が豊富にあるので、ほとんど自給できます」とのこと。ちなみに知り合いの女性にこの料理の写真を見せたところ「2000円でも食べたい」といっていたので、1,000円程度で体験もつくとなれば、とてもリーズナブルだ。ただ、福岡からだと阿久根までの交通費が高つくので、私が今度旅行で阿久根に行くならば、お昼に農家料理を食べて、その足で前から気になっている吹上温泉の宿に泊まる、といったコースを考えるとと思う。ドライブで、周辺の観光地といっしょに回ってもらうような仕掛けができるといいと感じた。

今回、いくつも体験観光をさせてもらったのだが、自分の好む体験とそうでないものもあるのだから、それぞれの体験で気に入る(ターゲットの)客層が違いそうだと感じた。お客さんを集めるにしても、体験観光で一括りにして幅広く宣伝するだけでなく、個別の体験の魅力、特に教えてくれる人の魅力をもっと全面に出した方がいいように感じた。また本業などで、すでに固定客がいっぱいいるようなので、そういう人にこそ体験観光をして

もらい、口コミでお客を広げてもらうといいのではないだろうか。自分もその口コミの発信源として応援していければと思った。

(ほんだ まさあき)

玄海で採りたいちごを使った料理、スイーツを味わう

「唐津玄海食プロジェクト

- 味覚ワークショップ -」体験報告

雪丸 久徳

日常生活に欠かせない「食」への関心が高まりをみせるなかで、地域と食をテーマにした取り組みが少しずつ動き始めている。その中のひとつに、佐賀県の唐津を舞台に「唐津玄海食プロジェクト-味覚ワークショップ-」という取り組みが行われている。体験してきたので簡単に報告したい。

このプロジェクトは、唐津玄海食プロジェクト実行委員会（事務局：佐賀県くらしの安全安心課）が仕掛けたもので、多くの方々に地元でとれる魚介類、棚田米、野菜、果実類など新鮮な食材を、現地の風景とともに楽しむといったものだ。私は全部で10回行われるワークショップのうち、8回目の「いちごを使った料理やデザートを作って味わう（玄海町）」に参加した。

ワークショップは、今回の食材であるいちごを栽培している地元の生産農家や、料理に使う魚を養殖している漁師、地元の料理家、一般参加者等20名で行われた。コーディネーターには、昨年秋から行ってる平戸松浦地区の特産品開発の仕事（厚生労働省委託パッケージ事業）をサポートして頂いた食環境ジャーナリストの金丸弘美さんが入っている。平日の午前中の開催ということもあり、参加者は40～50代の女性を中心であった。

会場に入ると、まず景色の良さに感動した。さすがに“現地の風景とともに楽しむ”と謳っているだけあって、演出にも凝っているなど思った。まずは佐賀県農業試験研究センターの方より、佐賀県産いちご「佐賀ほのか」やいちご全般についての説明があった。さがほのかは、“とよのか”を交配して開発した品種で、円錐形で見栄えがよく、果実が適度に硬いため日持ちがよいとのことだ。また、酸味が少なく甘味が強いため、さっぱりとした甘味でおいしいといった特徴があるとの



ワークショップの様子。真剣にメモをとる参加者



いちごのスフレ(左)といちごのドレッシングをかけた魚介のサラダ(右)

ことで、実際に食べてみたがその通りであった。その他、いちごの分類・歴史・産地・品種変遷・品種別特徴・栽培方法・基本成分から、料理・雑学に至るまで徹底して調べてあり、初めて知ることばかりでとても興味深い内容であった。

次に部屋を移動して、佐賀県唐津市和多田でフレンチ&イタリアン「ワイズキッチン」を営む中江義行シェフの調理実演がはじまった。今回のメニューは「魚介のサラダ、いちごのドレッシング」と「さがほのかいちごの温かいスフレ」。

いちごのドレッシング?と、その発想に最初は抵抗があったが、食べると意外にさっぱりした甘さで、旬の野菜や魚との組み合わせることで素材のフレッシュ感を一層ひきたてていた。

また、温かいスフレを食べたのも初めてだったが、味は言うまでもなく、いちごの香りと甘みがとろけて、スイーツ好きにはたまらないだろうと思って味わった。

料理の合間や試食中には、生産者、料理家との意見交換が行われた。いちご生産者や漁師とのやりとりのなかで、「地元にはこんなにも安全で美味しい食材があるにもかかわらず、そのほとんどが地元で消費されることなく大都市に運ばれている現実を知った。少しでも地元で食べられるような仕組みをつくって欲しい」という意見もでた。とても貴重な意見だと思う。生産者と消費者が面

と向かって対話することはなかなかないことなので、とても良い試みだと思った。

国の食育基本法の策定や政府が初の食育白書をつくるなど、今後食に関する取り組みが、積極的に進められることになると思う。そんな中で、一番大事なのは、消費者が食に関する知識や選ぶ力をどう持つかということだと思う。この味覚ワークショップでは、地元の生産農家や漁師、料理家や食の専門家が、栽培法や調理法などを紹介し、地域の多種多様な食を楽しみながら知ることができるようなプログラムとなっている。今は行政主導だが、今後こういった取り組みが地元へ根付くためにも、継続されることを期待したい。最終的には、このような取り組みが、地域の人自らの手で行われ、地元の安全な食への関心が高まるという地域活動につながればと思う。

(ゆきまる ひさのり)

佐賀の春の風物詩「佐賀城下ひなまつり」に行ってきました

原 啓介

佐賀の春の風物詩「佐賀城下ひなまつり」が今年も開催された。例年、佐賀市歴史民俗館周辺がメイン会場となり、鍋島家ゆかりのお雛様などの展示や、佐賀の物産・伝統工芸品等の販売が行われており、期間中は約10万人の観光客が訪れるイベントとなっている。

毎年、様々な企画が取り組まれているが、個人的に今年の企画の中で最も注目していたのは、おにぎりカフェであった。この企画については本誌でも何度か紹介しているが、平成18年度に策定した佐賀市観光振興戦略プランのアクションプランの中で、すぐに実行できるものを、18年度のひなまつりの時期に合わせ、前倒して実行したものである。

おにぎりカフェは、ひなまつりの期間中、佐賀（有明）・大和・三瀬・富士の4地区が週替りでおにぎりやみそ汁、漬け物など、地域の自慢のメニューを生産者自らがお客様に提供するイベントである。おにぎりカフェで出されるものは地元の農水産物で作られており、北部の山林や南部の有明海・筑後川で育まれた食材が提供された。例えば、北部の三瀬はいのしし汁、南部の佐賀（有



おにぎりのみそ汁、小鉢2つと漬け物がセットになった「やまと御膳」。500円と、値段もお手頃。

明)は海苔の刺身など、合併した新佐賀市の海から山までの特色あるメニューが用意された。

私は3月3日にひなまつりに行った。その日は大和地区の担当であった。旧大和町は平成17年の合併により佐賀市となった、山や川などの自然に恵まれた地域である。2時前くらいに行くと、いくつかのメニューが既に品切れであった。しかし、白いおにぎりや刺身コンニャク、お漬け物、野菜たっぷりのみそ汁など、大和の地のものを頂くことができた。地元の自慢の食材・料理だけあって味はとても美味しく、また量も丁度よく、大変満足した。おにぎりカフェの会場となった佐賀座は、佐賀県の陶芸協会会員の作品が常設展示されており、普段は静かでしっとりとした場所であるが、当日はおにぎりカフェに加え、「売茶翁の心もてなし茶屋」や、「道の駅大和そよかぜ館」に置いてある野菜や干し柿といった特産品の販売コーナーもあり、会場はとても賑わっていた。

また、地元の農家の方々がおにぎりなどを調理していたのだが、とても印象的であったのは、みなさんとても楽しそうに、張り切ってやっておられたことであった。レシピの解説など、とても親切に教えて頂いた。おにぎりカフェのコンセプトは、生産者と観光客がふれあう場、地元の人のもてなしの研修の場づくりということであり、これは十分に実現していたのではないかと思う。

好天にも恵まれ、春のような日差しの中、徴古館や佐賀市歴史民俗館、佐賀城本丸歴史館など、佐賀市中心部の観光スポットに飾られているお雛様や佐賀錦、鍋島緞通といった佐賀の伝統工芸などを見て回った。松原川通りや佐賀城のお濠など、水と緑と歴史のある街なみを散歩や買い物をする



料理をつくってくれた大和町の農家の皆さん。とてもいい雰囲気でした。

がらゆっくりと巡り、一緒に行った両親も、「福岡から1時間でこんないい雰囲気の観光地があったなんて」と、大喜びの週末であった。

(はら けいすけ)

その他のアクションプランの動き

- ・佐賀市観光のキャッチフレーズ：市のホームページやバルーンフェスタでのチラシ、公募ガイドなどに掲載したところ、2247件の募集があり委員や専門家等の選考を経て「ゆっつら～と、佐賀市」に決定した。「ゆっつら～と」とは佐賀の方言で「ゆっくりと、ゆったりと」という意味。
- ・物語、蘆蓄を活かした商品開発：佐賀出身で煎茶道の祖といわれる売茶翁の歴史にちなみ、有田の茶器・佐賀の和菓子・嬉野茶のセットを提供。

人との繋がりを大事にするマンション

雪丸 久徳

エンドユーザーである住み手の暮らしをどう理想に近づけるか、質をどう高めるかという考えをベースに計画設計されたマンションより、今は地主等の土地活用や投資目的でつくられるマンションが圧倒的に多いと思う。投資目的でつくられる場合は、いかに、リスクを小さく、早くもとをとるか、といった開発側の利益が計画の最優先となる。最近、住まいづくりと地域づくりがかけ離れていることが気になっていて、居住者の暮らしのことや地域のことを考えてつくった住まいで近くに事例がないものか探していた。すると身近な



保育所のイメージパース

ところに2つ事例があった。一つは、低層階に保育園を併設した子育て支援賃貸マンション「ibb wish 長丘」、もう一つは、住み手が組合をつくり、土地の取得から建物の建設、管理運営までを行うコーポラティブ住宅「F-style Nishijin」である。それらについての話が聞けたので、その概要を簡単に紹介したい。

子育てに不安のある人がもう一人産みたいと思えるようなマンション「ibb wish 長丘」

「ibb wish 長丘」（2007年3月完成）は、楽しく子育てができ、その笑顔が地域に広がって欲しい、という思いで建てられた子育て支援賃貸マンション（27戸）である。託児機能を持った分譲マンションはこれまでも例があるものの、賃貸で保育園を併設したマンションは全国的にもあまり例がなく珍しい。住棟プランをみると、小家族から子供が多い大家族まで様々な家族形態に対応しており、1LDKからメゾネットタイプまである。1階には保育園が併設されており、入居者には保育料を一部割引きする特典もついている。また、保育園には母親の交流広場を設けており、母親同士の交流にも配慮してあるほか、保育園が中心となり、月に一回のイベントを開催し、地域の方とも交流ができるようになっている。

私の住んでいるマンションでもそうだが、同じような子育てファミリー世帯が同じマンション内に住んでいても、なかなか出会うきっかけはない。「ibb wish 長丘」では、1階の保育所がきっかけで子育てファミリー同士、あるいは子育ての悩みや不安を抱える母親同士が交流できるので、親にとって子供にとっても住みやすい居住の場となるのではないかと思う。

住まいづくりを通して、良好なコミュニティが育まれている手づくりマンション「F-style Nishijin」

「F-style Nishijin」は、企画者主導で参加者を募り、その後集まった参加者が建設組合を結



各階で異なる外観

成し、約 10 回の「総会」を経て完成したコーポラティブ住宅（全17戸）である。総会では、コーディネーターのサポートを受けながら、参加者が主体となって各戸のプランや外壁の色、管理規約についての話し合いが行われた。各戸のプランは、戸建ての注文住宅に近い設計の自由度が得られるため様々で、住戸に仕切りを設けないワンルームのプランもあれば、5LDKといったタイプもある。一般の分譲マンションのように既成品を買うのではなく、計画段階から主体的にすまいづくりに関わるため、居住者は建物に愛着をもって暮らしている。廊下やエレベーターなどの共用部も大事に利用しているほか、居住者のまとまりがよく、管理もスムーズに行われている。また、「すまいづくり」の過程で育まれる隣人との良好なコミュニティが建物完成後も維持されているとのことだ。

住まいの取得は高価な買い物であるにもかかわらず、今は大半の人が既製品の中から選ぶことが多い。計画段階から「創る」すまいづくりが広まれば、それぞれ個人の理想とする暮らしが実現できるだけでなく、すまいづくりの過程で周辺の人や地域のコミュニティ（地縁）ができたりと、結果としてすまいづくりが地域にいい効果をもたらすのではないかと思う。

2つの事例を紹介したが、これらが普及していくには、まだ実績が少ないことや、事業の採算性、コーディネートする人がいないこと、すまい方に関する関心が低いことなど、課題は様々だ。普及にはまだ時間がかかりそうだが、住み手の暮らしを考えたすまいづくりを応援していきたい。

（ゆきまる ひさのり）

所 員 近 況

低級中品質の家を建てた話

まず、高級とか高品質の説明をする。この説明が正しいということではなく、糸乗がそう思っているということである。「正しい」という意味は、権威のある人がそう言っているということである。「高級」とは値段が高くて包装がいいということ、で、「品質」は中身のことで、味がいいとか使い勝手がいいという意味である。これは前置き。

ここからが低級中品質の話。家ができたのが去年の暮れ。風邪を引くといかんのので、温湿度計をおいている。

この家は、薪で焚くダルマストーブが暖房です。朝ストーブをつける前に、何となく温湿度計を見ていて、あまり変化がないのが気になって、1月28日からカレンダーにつけ始めた。

温湿度変化 28日晴れ14 /60%、29日晴れ14 /60%、30日から奄美大島、2月1日夕方帰着時9 /60%、2月2日朝12 /60%、2月3,4,5日は14 /60%、7,8,9,10日は16 ~19 /60%、11~13日は14 /60~65%、14日は昨夜来の大雨・大風で生暖かくても14 /60%、といった調子。

1月30日は、屋根が霜で真っ白になっていた。

奄美大島に3日間行っていた間は少し下がっているが、湿度は同じ。2月14日は土砂降りの朝だが湿度は60%。朝起きて着替えるとき、素っ裸になっても平気だ。

家の説明をすると、約30坪の二階建てで、一階に20㎡余の土間（コンクリート）があって、そこに薪で焚くダルマストーブがある。土間は除いて、床天井とも一寸厚（3cm）の杉の板で、気持ちがいい。壁はプラスターボードだが、中に断熱材がたっぷり入っていて、寒冷紗らしきものを貼ってシックイ塗り仕上げである。

この杉板とシックイ壁が、湿気の吸収・放出をしているらしい。

ブログを教えに来てくれた人が、「このうちは新築早々でも全く目が痛いようなことはありませんね」といった。

低級だが使い勝手はいい。“快適住宅”です。

しかし問題がないわけではない。今でも夜中に「パチン」とか「メリメリ」など、柱や梁が割れ



自宅の写真。竣工時のもの
る音がする。もちろん、昼間でもだ。

私は山陰の寒いところに育ったので（昭和20年には雪が3mぐらい積もって、二階から出入りしている家もあった）、土台は栗、柱は欅や檜、杉は板だけだった。

この家で気になるところは、土台に檜が使われている以外は、全部杉だ。その杉も檜も育ちのいい木で、木目が1cm近くもあったりする。金もなく、安く建ててもらおうと思ったのだから仕方がない。

「郷に入っては郷に従え」ということで、気にしないことにしているが、木材の乾燥度だけは気になる。

いずれにしても、断熱は床、壁、天井ともに丹念にやってもらったので、暮らしやすい家になっている。窓ガラスは全て二枚ガラスにしてもらった。家の中で結露するところはない。風呂場の窓も二枚ガラスだが、さすがに風呂に入っているときは曇る。蓋をするかお湯を落とすと、すぐ乾く。

以前の家が冬寒くて、夏熱い家だったので、娘家族に逃げられてしまった。屋根と壁の断熱、深い庇で、夏のことも考えている。これはまだその時になってみないと分からない。

そんなに調子のよいことをいっていて、なぜ「低級」なのか。

低級=安いということであるから、「安い」とはどんなことを考えねばならない。昔の住宅は材料費の比重が高かったが、現代は圧倒的に人件費だと思う。例えば窓のこと。窓はサッシとガラスで出来ている。その寸法を計りに来たり、メーカーに注文したり、嵌め付けに来たりで、随分人件費がかかる。今の日本は、工業製品は安い。サッシ屋さんが来たとき、悪くない品質のサッシと

二重ガラスにこだわった。これで結露が全くなくなる。品質上はかなり大きい。しかしサッシ関連の全費用のうち、ガラスの一枚ものか二枚ものかによる差は、たいした違いではないはずである。

そういう点で一つの失敗は、杉材の乾燥不十分である。「私は別に急いでいるわけではないので、竣工が半年ぐらい遅くなっても、材木の乾燥を十分していただいた方がいいのですが」といってみたら、「〇〇乾燥をするので大丈夫ですよ」と言われて、言葉が十分分からなかったが、「最近は人工乾燥技術もよくなっているのかな」と思ってしまった。しかし、“荒割”をして放置しておくという意味であった。細かいことにくどくど言わず、本質的な点は十分確認したがよい。場合によっては、間接的に言う手もある。テレビ番組でコセコセと言っていることが多いが、本質的なことは見えていない。私も40年ほど前に工務店で仕事をしていたので分かるつもりなのだが。

もう一つ言うと、人間の暮らしは「シロかクロか、ハレかケか」ではなく、ほとんどがグレーゾーンでなされている。そういう感覚で20㎡の土間を作った。土間は「ええがげん」な空間である。外側に1mのコンクリートの“犬走り”を作ったのも同じ考えである。

もう一つの自慢は、掃き出しの窓を作ってもらったことである。60年以上の昔話だが、私は田舎の生まれなので、国民学校一年生の時には、家の掃除で廊下の部分を受け持たされていた。掃除は、窓を開けてハタキをかけて、細かいホコリなどは縁側か土間に掃き出していた。そんなことからか、電気掃除機というものが苦手である。ホコリを吸い込んでも、見えない大量のホコリは掃除機の後ろから吐き出して、部屋中がホコリだらけになっているような気がする。

今の住宅は、黙っていると腰高窓にすることが常識のようにになっているらしい。田園住宅というならそれはないと思う。

これらが私流（昔から続いている）の常識設計である。 （糸乗 貞喜）



自治体都市計画の最前線

柳沢厚 + 野口和雄 + 日置雅晴 (編著) 学芸出版社

昨年、技術士の2次試験を都市計画部門で受けてみて、みごと不合格になった。景観法や地区計画のことは少々勉強していたものの、予期せぬ区画整理や再開発の質問が出て、全く答えられなかった。都市計画分野が広すぎるので、実務経験のない分野の勉強はなかなかツライ。都市計画法の改正で市街化調整区域のまちづくりも対象になったり、景観法もできたりとますます領域は広がっていくようである。

この本で扱っている分野も、田園居住 / 線引き制度 / 景観 / 地域地区・建築基準法 / 都市計画の

変更 / 条例 / 需要判例と幅広いが、それぞれが最近の都市計画に欠かせないキーワードになっているものばかりである。全て具体的な事例の話なので、自分が興味を持っているところだけ読んででも十分勉強になる。具体的な案件がある人は、都市計画手法アイデアのヒントが得られる。田園居住の分野には、糸乗の「田園楽住構想」も載っているが、つくば市中根・金田地区の緑の街なみを街の財産として考え、道路際の緑地を市が借地するという「景観緑地」の事例もなかなかおもしろそうだ。各分野毎に事例の概要がわかるイントロダクションが書いてあるので、とりあえずそれだけ読んで、必要になったときに詳細を読むといった活用もできる。時間がない人にも親切な構成になっている。おもしろそうな事例は是非現地に行って話を聞いてみたい。 (本田 正明)

第15回 よかネットパーティーのご案内

“よかネタ・よか味(あじ)”でつながる、よかネットパーティーを開催します。皆様の日頃の活動のお話・よかネタや、おすすめ一品・よか味を持ち寄って、楽しい“ひともうけ交流”ができればと思っています。皆様のご参加をお待ちしております。

日時:平成19年5月19日(土) 13:00~15:30

場所:警固神社境内 中央棟(建て替えて新しくなってます)

- ・新しくなった会場の都合上、調理・盛りつけスペースを確保できませんので、「おすすめ一品」がある方は、盛りつけ済みの状態でお持ちください。
- ・本パーティーではできるだけごみを出さないよう、例年有田焼お皿を窯元に注文しています。「ごみ軽減協力費」として1,000円のご負担をお願いします。



よかネット発行月の変更のお知らせ

これまでよかネットは、1月から奇数月の隔月で発行してまいりましたが、今年より1月、4月、7月、10月の季刊発行することにいたしました。発行回数は減りますが、これまで以上に、ネットワーク活動や取材活動などを行い、内容の充実に向けていきたいと思っております。これからもご愛読宜しくお願い致します。

よかネット No.86 2007.4

(編集・発行) 株式会社よかネット 〒810-0802 福岡市博多区中洲中島町3番8号 福岡パールビル8階

TEL 092-283-2121 FAX 092-283-2128

http://www.yokanet.com

mail:info@yokanet.com

(ネットワーク会社)

株式会社地域計画建築研究所

本社 京都事務所 TEL 075-221-5132

大阪事務所 TEL 06-6942-5732

東京事務所 TEL 042-501-2531

名古屋事務所 TEL 052-202-1411

株式会社地域計画・名古屋